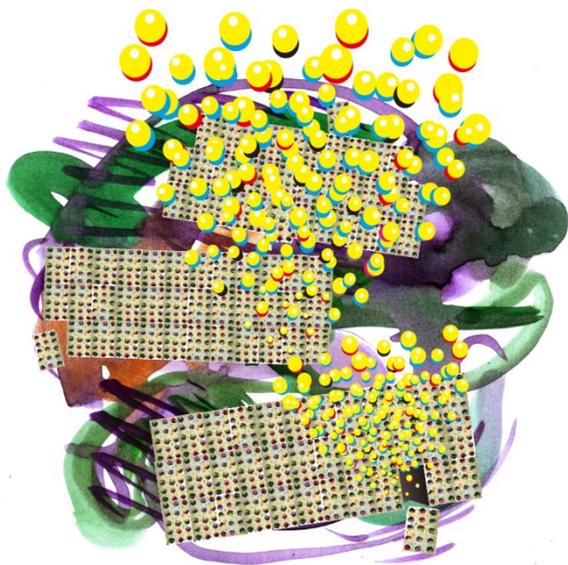


# 詩誌 立彩

*Rissai: A Journal of Poems*



第6号  
2014年8月

目次

伊東友乃	すこし 明るく	1
	春いちばん	2
	眠るわが子	3
	ま昼どき	4
猫野エミリー	それでもわたしは抗議する	5
	潮の音	6
	3470(サヨナラ)	7
栗山佳織	プラタナス	8
	あさり	10
	林さん	12
関根全宏	熟れた桃	14
	夢の子	15
高間かさね	看板に描かれた子供がおれに話しかける	16
	静かな動物園	18
姫田奈々瀬	自由のきょうせい	20
	トランスコネクション	21
	痛みものしこう	22
	卵	23
渡辺信二	全てに時がある	24
	父へ 戦後七〇年を経て	25
	雀の涙	26
	あれを讃える	27
	ある詩人の死	28

表紙原画	鈴木順三	表紙	「散逸な旅立ち1」
		裏表紙	「散逸な旅立ち2」

すこし 明るく

伊東友乃

あの日のかなしみを  
ひとつだけ とっておいたら  
そのまま 年月がすぎ  
もうじゆうぶんに  
わたしのなかで 育ちきり  
すこし身おもに なって  
今朝も おはよう と  
わたしに 言ったり する  
かなしみ は いつのまにか  
すこし 明るく なったようだ

春いちばん

伊東友乃

天気予報の とおり  
春いちばんが ふいて  
わたしの 耳うらで  
ひそかに まるまっていた 冬を  
すっきり 吹き飛ばしてくれた ようだった  
よく肥えた 赤んぼうも 地面に 身を のりだし  
(もういちど もぐって  
こんどは 地球の うらがわ から  
くるりと 産まれるつもり)  
その 生 の いきおいを  
腕で 抱きとめる のが たいへんだ  
そこいらじゆう に ちいさな 花ばなが  
きらきら 模型のように こぼれている  
わたしの 眼の奥そこから  
じんじん じんじん  
あったかい春が 沸いてくる

眠るわが子

伊東友乃

愛 という言葉を つかうのは 少々ためらうが  
それでも やわらかい 輪郭につつまれて  
眠っている わが子を みていると どうしても  
やってくるのだ まず あの 風音が  
そうして 耳を澄ましていくと  
こころが 燦々と あたたかく  
ひらかれて  
風にふかれる  
あかるいあかるい野が やってくる  
ひかりのなか揺れる 花々も ひきつれて  
私は そこに 宿命のように  
ひとりだが  
とほうもなく 懐かしい 感情とともにある  
だから 安心して 風にそよげる  
そうして また あどけない 寝顔にもどると  
ひととき 愛と 邂逅していた 自分に気づくのだ

ま昼どき

伊東友乃

くったり ゆだった白菜に 若鶏の肉をいれて  
南瓜の皮を 包丁で  
どうにかこうにか している ま昼どき  
わたしは ひどく 無心で 敬虔ですらある

きのう 髪をあらったことも  
おととい 菜の花ゆれる海を見にいったことも  
きよねん 子どもを産んだことも  
その どれもを 台所の白い壁に 塗りこんで  
ステンレスにながれる 水で  
ていねいに 人間くささ 清めていく

ぐつぐつ 煮だつ 鍋のした  
火が ちようどいいあんばいに 燃えるなら  
わたし まるごと ひとり ゆだねてしま  
とびきり 美味しい ひと皿を  
晩に 家族の もとへ 差し出そうか

それでもわたしは抗議する

猫野エミリー

(シー……)

教えてはいけないんだよ  
建前と本音があるなんて

シー……

教えてはいけないんだよ

「秘密保全法」に「秘密」があるなんて

「嘘を嘘で塗り固めましょう、みなさん！」と政治家は言う

わたしはテレビに向かってあかんべえ

見えている、見えているんだ

ほんとのことなんて

知っている、知っているんだ

ほんとのことなんて

2020年・東京オリンピック!? やるべきことは隠された。

さあ、骸骨と踊ろう、呪いの時代よこんにちは。

## 潮の音

猫野エミリー

昔はわたしも

海から生まれた記憶がある

太古、わたしの先祖も海の中で揺れていた

「あんたは孕みやすいから、お母さんになったほうがいいよ」

急かされている、声が聞こえる、言わないでくれ、おばあちゃん！

「子を産め、子を産め」

ワタシハ家ニ入りタクナイ、オ嫁サンナンテマツピラダ。

「俺が一人で歩いた並木道

お前と二人で歩く結婚式場。

子どもが生まれて、三人になるう」

「三人になるう」？ 元彼、何をあなたは言っていたの

嗤ってやるう、呪ってやるう、この身体を！

わたしの潮は荒れているのだ

わたしの潮は荒れているのだ

サ  
ヨ  
ナ  
ラ  
3  
4  
7  
0

猫野エミリー

ラインであたし、

彼に「3470」って送ってやったんだ

わかる？ 大昔に、ポケベルってものがあつたんだって。

その言葉だよ、「3470」

「？」って既読の後来たよ、ブロックしたよ

もしも「666」が悪魔の数字だとしたら

あたしの額には「3470」って彫られてるんだろうな

「サヨナラサヨナラサヨナラ」

「347034703470」

ナンバーに置き換えちやえば

別れの台詞なんて薄っぺら

束縛への処刑は数字で。

カレシがあたしを束縛してたから、さよなら。

——あたしは十六歳。

プラタナス

栗山佳織

夫とふたり植物園を歩いていると  
ひらけた場所に

わたしたちの人生を足し合わせても  
余りある時間が巨木となつて  
木陰をつくっていた

見上げれば

朝の光を帯びたうつくしい幹が  
どこまでも高く伸び

初夏の青空が広がっていった

わたしたちの過去も未来も

死んでしまった多くの生き物と同じように  
この木の中へ流れていく

誕生と死に始まりも終わりもあるのか  
わからないほど透明になつて

(身体だけではなく魂もいららないのです)

夫に声をかけようとして振り返れば

別の樹木を見つめている

やわらかな風がわたしたちの間を吹き過ぎ

時を駆け上がるようにして

一番高い枝葉の先から青空へ広がっていった

あさり

栗山佳織

あさりは貝殻に

ふるさとの砂地の層を映している

ボールの中であさを洗えば

かちかちと濁りのない音を立て

大粒のものも小粒のものも

甘い色をした身を

固く閉じた貝殻の中に隠している

バットに並べ塩水を灌ぎ

新聞紙をかけて台所の隅へ置く

(名付けられないほど小さな頃

見知らぬ父母の姿に似ようとして

あさは暗い砂の中へ潜ったのでしょうか)

翌朝には

新聞紙があたたかく湿り

あさりの吐いた水と見た夢で

滲んだ活字がふくらんでいる  
もとの意味から少しだけ自由になって  
活字の海へ漂い出す

新聞紙をめくれば  
二度と戻れない砂地を探し  
あさがやわらかな管を伸ばしている

林さん

栗山佳織

夕暮れの給湯室で

こどもがなかなかできないんです、

と林さんが言う

茶渋をこすっていた手を止め

背の高い林さんの横顔を見上げると

降るはずもない細い雨が降っている

子をほしいと思わないわたしの肩にも少しかかり

あー、と続くあてのない声を出す

妻が年齢を気にして焦ってるんです、と

小さな目で瞬きせずに続けるので

わたしの「あー」もか細くなる

濡れ続ける林さんに差し出せる傘もなく

こどもはどこからやって来るのだろうか

雨の向こうの窓を見る

答えを探すには大きすぎる夕焼けが

四月の空に広がっている

(かつてわたしたちは父母のもとへどこから来たの)

子をあやす林さんの  
猫背気味の背中をずっと昔に見たような気がして  
わたしは何も言えずにいる

## 熟れた桃

関根全宏

早稲田通りにある 六畳一間のアパートで  
夜風に触れ 濡れた髪で  
二階の窓から眺めていた  
父にならずに出て行った あの人の背中を

それが、あの人との夏の記憶  
肉体が 貸し出されたものならば  
なぜわたしたちは 寄り添うのか  
なぜ、あの人は いつてしまったのか

その思いを わたしは一篇の詩にする  
あなたでなければならなかった定めを知る  
そのために もう一篇 詩を書く

口の中に あの日二人で啜った  
冷たい桃の汁が 甘く広がる  
いま、わたしがいて 言葉を綴る

## 夢の子

関根全宏

わたしの子どもは 夢の子です  
夢のなかで 手足をのぼし  
だんだん ふくらみ  
内側から お腹をつつき  
やがて 産みおとされました

祝福したのは あの東雲の空。  
澄みきった 一日のはじまり。  
それに 風。とおいところから  
運ばれてくる 歓び。

けれどもそれは 夢の子です  
声をかけても 返事がなく  
とおくで 滲む 雲のように  
凍結した 時間のなかで  
ゆらゆらと ゆれているのです

看板に描かれた子供がおれに話しかける

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)



静かな動物園

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)



## 自由のきょうせい

姫田奈々瀬

空に、両手で放したのは  
あげは、くまぜみ、しおから、雀  
手の中におさめておきたかったのは  
夢、憧れ、願い、抛り所

ナナホシなのにあなたは「捨て」と言つて車の窓を開けた  
私はくるくる這わせて愛でてしばらくそうしていようとしたのに

羽をちよろり出して、あの子の尻尾みたいに震える

目は白いのね、複眼でどう私を見ているかしら

本当は高みに行きついて飛び立ちたいね

私は傾いて傾けてアップサイドダウン

おまえはエッシャーを体感できるのかしら

私は何度も手放してきたからわかるわ

あなたはやり方を知らずに、振り落としてしまったね

捨てられて踏まれてつぶれたかもしれないね 私たちの乗った車に

トランスコネクション

姫田奈々瀬

肉親だつてわかるようなわからないよな意味疎通  
だけど他人だつて卵で包めるのですから  
探し物は未完 見つけ物はファミマにあるかな  
ぺらぺらの紙より薄くて新しいエアリーな些細に  
打ちこんでも何かぞくぞくするものに成るかしら

心を砕いて身を尽くしても声が届かないなら  
例え泳いで渡れても その人は向こう岸の人、きつと振り返らない  
パントマイムの壁のようなふんいきで食えない人より  
愛すならばアイコンタクトできる人よね

世に塀と垣根はないと言いたかったんだっけな  
でもあるの だから共生を尊ばなきやいけないの  
食べられて殺されて追い出されるもの  
憎まれるならそれは目されてるね

仮面の視線は私を通過して背後にひたと据えられる

## 痛みのしこり

姫田奈々瀬

十五夜でもないけど切りうさぎ 両面色つきのすてきな画用紙にふさわしい  
幼稚園から使ってる黄緑のはさみは切りにくい

うさぎと一緒に自分で切ったから 笑って交差点渡った

「だいじょうぶよ なんてきわちやんが泣くとね」

ランドセルカタカタ 指先の三日月

渡り終えて母に話したら 急に痛くなって青くなって

ちよつと泣いた 私の三日月

でもこれは私の賞（うさぎ）の対価になった

だけどもまえの三日月

大人しくしてたのに ぱちんと切った 胸元1cm

きやうんと泣いて 少し走り回ったただけで

結局私の腕の中に飛び込んできて 緑の目を閉じた 抱っこは嫌いなのに  
信頼の、従順の対価の痛みをおまえはどう処理したのだろう

私が謝罪のために与えたのは褒美に与えるのと同じおやつ

## 卵

姫田奈々瀬

卵を孵すためだけに生まれたようになんていわれたくないよな  
でもそれ以上にすてきな理由で見つからないような気もしてるけど  
毎月毎年毎日これのために 泣いたり怒ったり捨てたりしてるのに  
子と母がともに生きてることが何か悪いことのように

「成熟を過ぎないように生きなさい」  
腐るか枯れるかカビが生えるか それは君らも同じはずなのに

君らは繋がってく増えてくのこしてく  
私たちは劣ってく切り離されていたんでいる  
何故君らはそちら側をつくって囲って  
私たちに残りをおしつけておしやって笑ってるんだらう

それでは蜘蛛の糸が切れるよ  
赤い糸もとうに切れているんじゃない  
世界をネットで繋ぐよりも先に  
卵を包むハンモックを編むのはいかがでしょう

全てに時がある

渡辺信二

三月一〇日 早朝から久しぶりに晴れ  
今なお寒く

シベリアは いつまでも静かだ

今は仙台の昼

お姉さんが夜 ウナギを食べべに来てと言っていました  
私は これから少し休みます

今は曇りから雨に変わる 那覇

午后から雨読す はは から ふうふ まで  
百科事典を手にして 思いに耽る時

今は暮れなずみ

まだ目覚めない妻を求める

前兆はない—— 熊のなお眠る時

夕刻の雪の時 明るい光が暗く降り積もる時  
知床で キタキツネの子が雪原を走るだろう

父へ 戦後七〇年を経て

渡辺信二

今が春ならば 父の祥月命日

仏壇に 櫻の切り枝を飾ろう 多少は

悲惨さが減る 減るほど悲惨な息子の人生だ

「花なくて 世界は寂しい 誰か住まん」と

かつて 父が嘆いた ほんとうは

現世より花鳥風月が好きな人だった

ウマイことが得意なヤツほど得をする

そんなニッポンにしようとして

父たちが 敗戦後 頑張ってきたのか

生まれた時から人生が苦手の人も

楽しく暮らしていけるようにと 願っていたはずだ

だけど今 こんなニッポンを怒りも憎みもできず

ただ花を見て 「花の香の 父にも届くか」と尋ね

あなたの息子は そこで 下の句を見失う

## 雀の涙

渡辺信二

転々手鞠のはずれ歌

あの優しい母を忘れたせいか

意地悪ばあさんが 坂を転がり落とす

おれたち まるで雀のように憎まれる

今はもう無い竹やぶで

人目を忍んで「あんたがた何処さ」と

手鞠を探し おれたち

涙を流し続ける

死ぬなど 怖くはないさ

先に逝った者を思えば

死ぬなど 何ともないさ

だけど ちよつとだけでも

人間らしく生きたかった

雀を追い出す国には住みたくなかった

あれを讃える

渡辺信二

わたしたちは むしろ あれを讃え  
あれに呼びかける あれこそが  
この地上にあつて 永遠を垣間みさせる

確かに あの姿かたちは 呪縛  
あの言葉は 呪詛だろう けれど わたしたち  
いつでもどこでも あれのものです

ええ 支配を耐えましょう  
耐えれば 苦しみは  
一瞬にすぎません  
どうか わたしたちを救って下さい

あの誘い あの喜びが  
闇を突然 真昼の輝きに変える  
わたしたち 生きては あれのもの  
死んでも 遂には あれのもの

## ある詩人の死

渡辺信二

「詩とは とても小さい小さい声だ

原稿用紙に記しておこう」

「でも わたし 詩が声だとは思いません」

「声は読みである 声はひとつの解釈である」

「船戸さんがレクスロスに おまえの詩は何だ と言いつつた

あの声も 詩ですか」

「あの声は レクスロスの記憶に残るだけ 記録されません」

「では もうひとつ尋ねますが あなたのこの撞着を

声が押し流すと思うのでしょうか」

放ちたいものを放てず

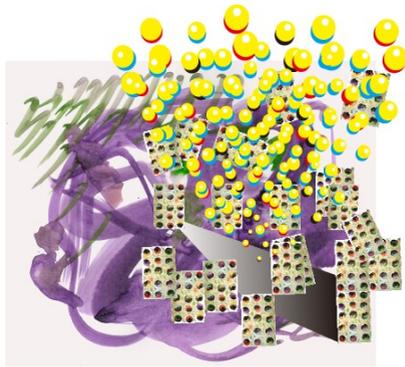
抱きたいものを抱けずに 三年 死んだように生き

ついに沈黙のまま 敗れ去る

——もう十分でしょう 人形を抱いて 安らかに眠りなさい

遺った草稿を 大家さんが 集めて火にくべる





詩誌『立彩』第6号 2014年8月1日 頒価800円

編集発行 「立彩」

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3

フェリス女学院大学文学部英米文学科 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311